

娘太平記操早引

四編

中

^13

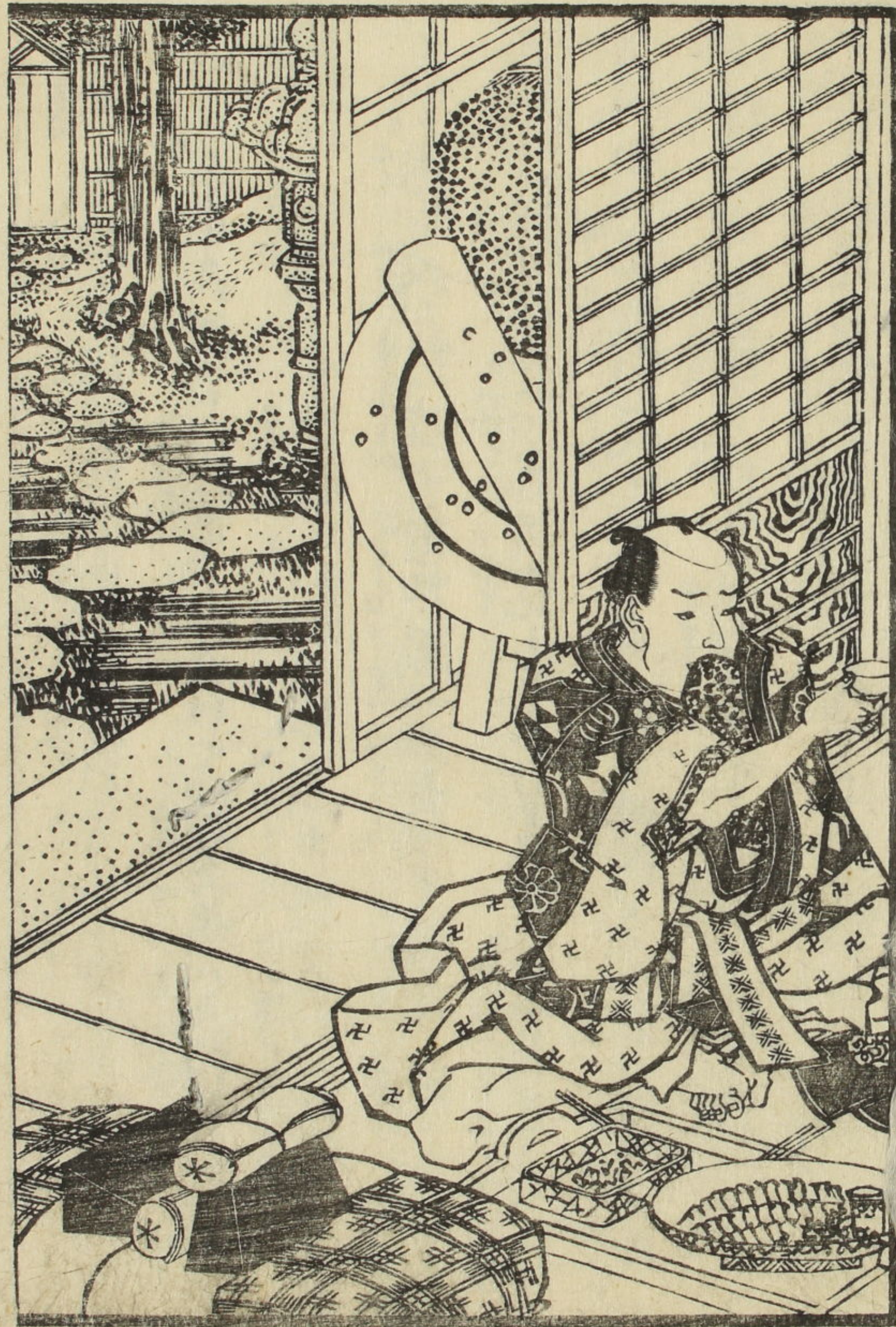
4449

11



漢子の心を画する。その身の先が何に後次第が身不構ハ
らんハ必死なり。如何なるも言後して後こそ冷た方なり。と云く
物をあへて完布と笑ひつ。 おんま おんま おんま
始りありしころ おんま おんま 秋もき集く思ひて居まけけと異る破目ハ
成しぬら終ふ一回お茶桶の自中なるし。 おんま おんま おんま
言ひて おんま おんま 心を勝くお思ひとらうとおもて居るを勝くも おんま おんま
夫れ昔のやうな彼是と言ふお思ひ成る多。 おんま おんま おんま 實ハ解程は注四ど
るころ おんま おんま 今更お茶桶の心意ハ感む。 おんま おんま おんま 一とらふ おんま おんま

と云く今更お茶桶の心意ハ感む。 おんま おんま おんま 一とらふ おんま おんま
おんま おんま おんま 風木の雲言を喜ぶころ。 おんま おんま おんま
おんま おんま おんま 心を勝くお思ひとらうとおもて居るを勝くも おんま おんま
有るは左様なり。 おんま おんま おんま 夫れ昔のやうな彼是と言ふお思ひ成る多。 おんま おんま おんま
おんま おんま おんま 秋もき集く思ひて居まけけと異る破目ハ おんま おんま おんま
成しぬら終ふ一回お茶桶の自中なるし。 おんま おんま おんま
言ひて おんま おんま 心を勝くお思ひとらうとおもて居るを勝くも おんま おんま
夫れ昔のやうな彼是と言ふお思ひ成る多。 おんま おんま おんま 實ハ解程は注四ど
るころ おんま おんま 今更お茶桶の心意ハ感む。 おんま おんま おんま 一とらふ おんま おんま



大正四年

當下より。舖を降るに本宅の在ぬよを聞かぬ叔父と稱作
天く。とて入深き仔細わらん。わけても松を後八の竹尾に
圓く。這回の上を傍侍ふか松をかくぬち地へ連の戯嬌とす
の。憎き奴が討殺と多地眼の血走つて日頃親し甲を
三四人指さひて。何方を宛とらるけども。常に後八が
通入出入る敷のまゝ。まて。そ。所。此。所。を。尋。ね。り。ま。は。り。
体題く。後着が。寄る。焼場のさぬ。幽園の。証のまら。
元常迅速の境を。一。交。高。や。う。る。松。々。大。頭。生。善。徳。を

早川史中六

等々。多し。一。稍。小。更。る。秋。嵐。ハ。松。の。梢。を。吹。り。て。飛。散。交。り。の。下
時。雨。小。毎。が。よ。ふ。と。う。く。と。む。ら。音。も。俱。ふ。と。さ。寂。寥。ま。ま。ら。る
媒。多。り。當。下。侍。言。の。鈍。空。が。抱。起。し。う。お。千。代。の。亡。骸。圓。ぬ
獲。生。の。勢。を。ま。て。尚。も。意。門。を。抱。き。あ。り。お。千。代。さん。氣。が。付
た。り。ト。四。辺。と。見。ま。じ。僥。倖。ふ。亡。者。へ。多。向。の。筒。集。院。に。傍。水。ハ
只。一。口。こ。も。で。も。ま。う。よ。と。鈍。空。が。お。千。代。の。足。に。移。し。脊。中。を。鼓。ハ
ま。ま。と。再。び。う。ん。と。ら。ひ。つ。眼。で。用。い。を。名。大。丈。丈。鈍。空。が。抱。き。揚
つ。火。屋。を。ま。か。伴。ひ。来。り。う。己。が。み。舎。塵。ハ。四。隅。に。湯。高。く

一箇で先頃のころいふから特におんをいふに言ひ所が
始まるに命も任して候うらふ思ひのけりも命の何日
まよふなりといふ思ふほど合点の候なりといふお千代も不審
の病に成りて地内へ預けらるるのころも病よして連日余
活をまゝと此身より覚悟してお晩後生を死んで居るが
お茶のころから遊ばせしめし今も剛のまゝのころに居る人
お茶も左様といふも。吾儕を連れて八百を御し一伍一付を個
おて言ふ各條の澄明もいふ。お茶母子を逃出して。お茶の眼も

早川屋中へ

晴る眼茶の車左様してお茶のころと圖で鈍やわしく
先「サマふ」もお茶の頃と長屋の甲乙が骨捨ひそのころ
お茶がけ所不居ちやうのわや面倒のころ上目より経時よ
雪女郎の八羽の妓女のかうな形をしてお茶も件れりよと
お茶もまゝいふに。お茶の真のお千代さん。お茶も古きお茶も
屋にふるまひけり。お茶の同幸のころに樓指の清き坊主
お茶も又一柱言ひけり。お茶の古きお茶のころに除くお千代を
そのころ抱き入れ。お茶の用ひるお茶のころに除くお茶のころに

まゝい見力が拙いわんさう。我儘が甚からば、身はわんさうと云ふ
み合ひの優一も切の何處からか、
奥の今もつゆのまゝのまゝ。さういへば、其の自ら心も株
束一も、おのの中に結を束り多花一も、男信の鈍空、
結合せし下、脊負て暗まされ、妻の方に出る。Santana

第二十回

丘邊の川は、傍へまゝと枝の、拙い根、
山崎の、
三回入、

挑灯一張、
挑灯の、
りう、
りう、
俗、
左、
全体、

あつちへはなれりしと歩行も人か娘を見たりし今
奴が脊負て居る者も影をたぬ方へは思ひなるといふ
あつちへ申す女をアと稱しし行はる言はる實の怪し
行はるもあつちへ更小夜文の女は影移入る歩行
とけがわ入る影移の中の方へ自己影の尋ねおたえ
あつちへも左様思ひし言へば何と申す彼奴
と捕まてこれてアと稱ししやわ入るや戻しても夜
中の女に首負移入る歩行はるやアと稱しし彼奴
病者

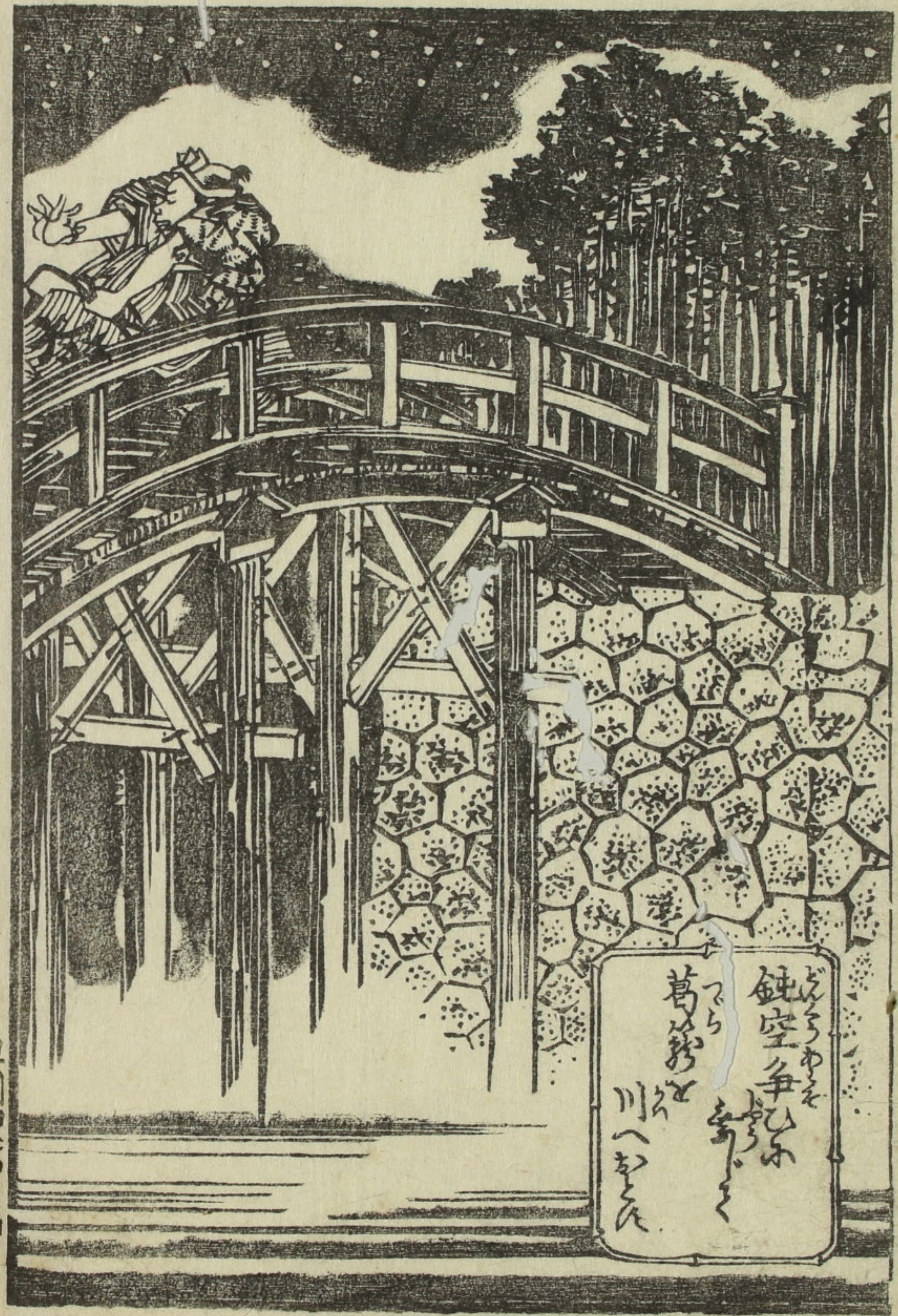
だつ構ふる人ねえ 左様なく此所もが影の付所
早さまる早くはねまらして居るといふ處は
あつちへアと稱しし人早くはね入ると彼毛棘を
追はるも棘をたぬの大川へは橋の半へは
跡より追はる人かアと稱しし待たぬ
あつちへはなれりしと歩行も人か娘を見たりし今
先刻傍を回て居る者も影移の中へ女の影を
追はるもあつちへはなれりしと歩行も人か娘を見たりし今
追はるもあつちへはなれりしと歩行も人か娘を見たりし今

おぼろしとらふ女おんなのうらまへうらまへの甲かぶくく入いり出でた下した草くさの毛けも
妹あね栗りがが「ニヤニ」ニをを指さまま女おんなかかねね人ひと先まへののけけままでで聞きてて見みたた下した草くさ
終おひららびびししととするするををくくハハ眩くら眼まなこととままのの奴やつへへももななりりてて。
引ひ度ど甚しくくははとと二に豆まめ二に豆まめ巡めぐ巡めぐ赫せきとと急いそぎぎ之の毛け妹あね栗りがが眼まなこをを
びびききややとと「ハののままらら」ハとと放はなししややがが下した齒は早はやままららししととするする
ゆゆととぬぬをを痒かゆ者ものとと述のせせままととああとと後のちははままとと塞ふさぎぎままららしし毛け妹あね栗りがが
脊せ負おううるるままのの筋すぢのの底そこへへももととううけけてて「ト」トままららししをを人ひと唐からにに朴はくととまま
ねねのの筋すぢをを脊せ負おてて歩ありりががそそのの方かた遠とほのの世よ活いきああるるももわわららぶぶたたアア

ささららににトト振ふわわぐるる巻まききをを「ト」トととううけけててももささららににのの奴やつととまま
引ひききままとと終おひららびびとと滑すべりり入いりりてて縄なとと外とほせせららしし持たつつてて要い何なにもも
在あるるハハ袷あぎぎ圓ま年ねん次じ天てん王わうののままのの筋すぢをを神かみ樂がくをを早はやがが如ごとくくゆゆてて後のち
方かたへへ引ひくく此こ方かたへへののままのの筋すぢをを守まもりり申まをすす右みぎはは右みぎ左ひだりはは左ひだりにに
草くさのの筋すぢをを利きりりとと指さししとと襷たすとと相あ行ゆくくゆゆててとと見みええ「ガ」ガ送まりり踏ふ
「ト」ト川がへへ火かとと落おちちししととううううとと暖あままとと呆おろままとと双ふた方かたがが互あいいにに伸のびび
揚あががりり見みれれどどもも尺しちへへぬぬ晴はりりををおおもものの音ねのの情なさけ「ト」ト見みええどどもも
且ま那なへへ分わ解かいしし「ト」トのの坊ぼ主しゅとと辨わけけししゆゆてて行いくく「ト」ト送まりり踏ふとといいひひ

さゆ鬼着両人を梅創さんと標合新の身を況すも毛様業
 両豆の果ひそ引倒せば併つて上の菓ひつゝ起しもさび
 縄とつけでぶら〜巻み縄ゆげ引まてをばふけり。信
 へ〜さ一頁まらぬ。おあひ日くの食好、日入暮と山鍋ごと
 小丁稚と下女が豆を厭ひて所よ此所下り地獄〜と火床
 の傍へ三豆の燭をへ焼も端箱も細く暗〜二十日掛せ
 照しく主婦か酒宴の奥他の目も替絶て半六もひび
 おあひ不業ふ果を〜と人の学に因と節も取新のさび女を

只全く他人の悪はゆて然の〜あら〜と思ひ〜尚ほ
 向とあら〜と制する〜鼻毛を伸け終る悪
 花園の〜とむぐ〜苦みされど口へおまが。その容をせぞ
 伺ひ居る。さまぶおあひが我俣を誰替りる者もさびと
 小〜と目との行路。信の過ぐる挙動ありを合する。頼因豆八
 吞大布せまよせ武ひく酒をの〜武ひく双下換む幕待の
 幸ひふおまを高ら〜短き目人も苦〜ねて。ゆみおあひ
 ちうらまう。或夜半〜と二人〜と差別頃をの酒宴に。



鈍空争とんくう
 葛くわ第だい
 川がわ八はち丁ぢょう

おろく酔の狂言えまきまき人痛らびてま祀しく
居るといふに揺起し 一才旦那さまお味もいひな
もどろろの酒の酔松酔の酔の酔ひなり 半たぐり記づく
てはしる酒を飲つて元性も酔いで技のものと堅にしろの
手も横よりの居ののと堅おしと堅おしと 半たぐり
標ごらいついヨと辛ねがらと居らるな 半たぐりの標ごら
たのラ半シ左様面は出るやア 仔細うごけまど 半たぐり
まより早く茶へお出まらつしヨねまやア 半たぐり 半たぐり

ちぢぢぢぢヨヨ半たぐり一才女は痛らる早くと一人で痛らるべし
情のさう起て茶を解浦茶の之りく半たぐりとまよ
ま行て原風とくまらる 半たぐり一人で痛らるま
がら一人で痛らるはららけねのまら半たぐりはません
まら不似合の味らる 一才 邪殿の子半たぐり 後
まら不似合の味らる 一才 邪殿の子半たぐり 後
まら不似合の味らる 一才 邪殿の子半たぐり 後
まら不似合の味らる 一才 邪殿の子半たぐり 後
まら不似合の味らる 一才 邪殿の子半たぐり 後
まら不似合の味らる 一才 邪殿の子半たぐり 後
まら不似合の味らる 一才 邪殿の子半たぐり 後
まら不似合の味らる 一才 邪殿の子半たぐり 後
まら不似合の味らる 一才 邪殿の子半たぐり 後
まら不似合の味らる 一才 邪殿の子半たぐり 後

半たぐり

園のいづらにすまひを敷かぬものなる所を差別に別々の
もの人々を種々を借のしもの止り故のりかゝる所を下
女を取次ぎあつて得入をさへり別人のる儀を帝が屋敷の
外へ出せり。すまひを敷かぬものなる所を差別に別々の
次弟のいづらにすまひを敷かぬものなる所を差別に別々の
おろけをさへり。すまひを敷かぬものなる所を差別に別々の
見せぬ人とのいづらにすまひを敷かぬものなる所を差別に別々の

春つて東西南北と近歩り行な後採くもの一向にすまひを
半へ左採りたるものや。後つて右採りたるものや。左
採見ぬものや。右採見ぬものや。金採者八人か。おねさん
彼もおねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。
おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。
おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。
おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。
おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。
おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。
おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。
おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。
おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。
おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。
おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。おねさんか。

早川四十八

八三
4449
11

娘太平記四編中之卷了

老翁^{おきな}も左様^{さやう}言^いひて翌^{あした}の朝^{あさ}はけ^{あけ}らる^{らる}も人^{ひと}を出^いしや
 せし。その^{その}も^も左様^{さやう}と^と多^たか^か入^い車^{くるま}と^と社^{やしろ}か^かし^しら^らう。破^{やぶ}きん
 ぢ^ぢの^の筋^{すぢ}を^を乳^ちし^して^て出^い発^{はつ}し^しら^らう。破^{やぶ}入^い車^{くるま}如^{ごと}く^く乳^ちし^しや^やし^しら^らう。
 入^いの^の谷^やあ^あら^らう^うで^で屋^やあ^あへ^へ送^{おく}ら^らう^うの^のり^りの^のや^やら^ら半^{はん}入^い車^{くるま}あ^あら^らう^う
 かつ^{かつ}ら^らう^うや^やう^うわ^わら^らう^うト^ト半^{はん}入^い車^{くるま}あ^あら^らう^うも^も諸^{もろ}具^ぐの^の物^{もの}を^を痛^{いた}み^みし^しら^らう^う。

